

交代人格と IIC (Internalized Imaginary Companions) との区別

Ralph B. Allison, M.D.

この論文の要旨は 1998 年 11 月の国際解離研究会秋季大会 (ワシントン州シアトル) において発表された。

導入

1972 年に、私は正しく多重人格障害 (M P D = Multiple Personality Disorder) と診断することが出来た最初の症例、“ ジャネット ”に出会った。彼女の ISH (Inner Self Helper) が電話で私に自己紹介した時に人間の心は 2 つの部分から成り立っている事を私は教わった。 私は彼女の交代人格達に問診したが、完全な精神的統合には至らなかった。一つには私はその時には正しくこの様な疾患を治療するすべを知らなかったこと、そして今ひとつの理由は彼女がカリフォルニアから出て行ってしまったからである。

1973 年に、私が 2 番目に M P D と診断したキャリアに出会ったが、この診断は正しくなかった。現時点から振り返ってみれば、当時私がキャリア本人や私を殺害しようとした怒れる交代人格と見なしていたものは、交代人格ではなく IIC (Internalized Imaginary Companion) であった。 それから私は少なくとも 10 以上の当時私が交代人格だと思っていた IIC に出会っている。 キャリーは、しかしながら一人の交代人格を持っていた。それは私の診察室で “ あなたは多重人格障害である ” と告げたときに作成されたものだった。 すなわちこの交代人格は多重人格障害という診断をどうしても受け入れられないキャリア自身が、疾患を受け入れるために作り出したものだった。彼女は現在の私の診断クライテリアからすれば DID (Dissociative Identity Disorder) (解離性人格障害) であるが M P D ではないことになる。

キャリアもまた、町を出ていくことになり、その為か治療なしでもおおかたの IIC は消滅した。だが、彼女は衝動的に、アルコール中毒の男性と結婚するために町に戻ってきた。やがて彼女は、夫と争うようになり、新しく怒りの IIC を作り出した。その IIC は彼女の夫や治療者である私を殺そうと試みたのだった。 私は彼女を病院に入院させたが、すぐに退院してしまった。退院の翌日、夫が彼女を捨てて出て行ってしまったことを知り彼女は自殺してしまった。

この彼女のケースがきっかけで、私は解離性障害の患者において交代人格と IIC は異なるものであり、それをきちんと認識し治療に当たらねばならないという責任を負うことになり、また、種々の困難を負うようになったのだった。 この交代人格と IIC の相違は私がヒルサイド・ストラングラーとして有名な殺人者であるケネス・ピアンキの精神鑑定を依頼されたときにいっそう際だつことになった。彼が果たして M P D なのか、彼自身が他の人格と呼んでいるものが偽りなのかと言う論議は、当時の我々の業界では最も知られた人々を巻き込んで争われた。私には、彼は自分の M P D の症例とは異なると思えたので、論争では私は中庸の立場をとった。今では彼が我々鑑定医に示したすべての交代人格は IIC

であると確信している。MPDに罹患しているわけでもなく、また精神的な病気だと偽っているわけでもなく、彼は第三の状態であったのだ。それはごく表面的にはMPDによく似ているがIICは“感情的想像力”によって創造されたものであり、解離現象ではない。

定義

解離 Dissociation：“Dissociation”という言葉は解離のプロセスを経ていない多種多様の精神症状を説明するために誤用されてきた経緯がある。私は従来の定義に従う方がより好ましいと感じている。この言葉はラテン語から来ている。“DIS”は“not”(否定)を表しており、“Sociare”は“To Join”を意味している。“Dissociate”(解離)とは“共同や結合から解かれて離れている”状態とすることができる。故にこれは精神的な外傷以前には一つであった何物かが二つに分かれたことを意味するのである。

この言葉を精神病理学的に用いるならば、私たちは人間の子供すべてが生まれながらに持っている心の二つの部分に思い至らなければならない。不幸にして英語を含むヨーロッパの言語にはこれらの二つの言葉を指し示す大元の単語が存在しない。だからこれらのコンセプトをそう言った言語で語るのは、非常に不都合である。一方、日本人はこれらを理性と感情と呼んでいる。紀元前300年頃ギリシャの哲人プラトンはそれらを“合理的な魂”(Rational Soul)と“不合理な魂”(Irrational Soul)と呼んだ。MPD患者であるジャネットのISHはプラトンの言うところの“合理的な魂”である。私はMPD患者においては心の二つの部分をISHとオリジナルパーソナリティと呼んでいる。MPDではなく統合された人間において、それらはIntellectual Self(理性)とEmotional Self(感情)である。

多重人格障害(MPD)：私の定義においては患児がMPDを発症するためにはいくつかの条件がある。第一番目に、患者はグレードVの被催眠感受性が無くてはならないが、これらの人々は人口のわずか4%に過ぎない。これら被催眠感受性の非常に高い人たちだけが解離して真の交代人格を生み出すことが可能なのである。患児がグレードVの被催眠感受性が無ければ、何か他の要因に暴露されていようともMPDとはなり得ず、他の精神病態を呈するのである。第二番目に、患者は生命を脅かすような肉体的・精神的虐待を7才以前に受けている必要がある。この年齢の子供達にとって常には両親は庇護者である。しかし同時に、患者の両親は虐待者なのである。通常両親が子供に与える罰程度ではMPDになるには不十分であり、生命の危険を感じるほど強い恐怖にさらされるような体罰・虐待が必要である。7才というのがIntellectual SelfとEmotional Selfが解離可能なだいたい年齢上限である。これ以上の年齢になると精神的な外傷が強くても患者は十分に成熟してこの心の二つの部分が解離することは無くなる。第三に患者の両親は偏向している事が大事である。両親のうち、どちらか一方は虐待者であり、他方は潜在的救済者であると患者が考えている必要がある。この役割は時折入れ替わることも可能である。患者は両親のどちらかに虐待されているときには他方に救済を期待するのである。第四には患者に兄弟がいる場合には、患者自身が唯一虐待されていて、他の兄弟は正常に育てられて

いる。少なくとも患者と同じようには強く罰される事もなく意図的に虐められることもない。患児から見ると他の兄弟達は虐待されていない、と感じている必要がある。

私のMPDの定義においては、最初の解離は心の二つの部分が離れることでありそれはIntellectual Self(理性)とEmotional Self(感情)の解離である。患者が生命の危険を感じるほどのトラウマに直面したときに、彼女の理性は、生命を維持する目的で感情から離れて行く。患者の感情は体と脳から離れて安全な待避場所へ避難し、理性はISHと変じ様々な交代人格を創造し始める。これらの交代人格は患者のEmotional Selfがこれから先成長する過程で獲得するであろう“性格の部品”から作られる。ISHが最初に形成するのはFalse Frontという交代人格である。この人格は虐待する両親から身を守り殺されないようにして日常を過ごすようにプログラムされている。

私の定義による純粋なMPDの例は“クリスティナ・ピーターズ”である。彼女は“Tell me Who I Am Before I Die”(訳注:この本も日本では刊行されていない)の著者でもある。この症例の診断については1998年に刊行されたHypnosに私が発表した、“Multiple Personality Disorder, Dissociative Identity Disorder and Internalized Imaginary Companions”に詳しい。

Dissociative Identity Disorder(DID)(解離性人格障害):私の定義になるDIDは患者の年齢が8才を過ぎるまでは生成されない。かつ、Emotional Self(感情)からIntellectual Self(理性)は解離していない。それ故にISHは存在しない。この患者は上位50%までの催眠感受性を持つ人たちのグループに属する。グレード3-5である。理性は感情がコントロールするには複雑すぎる種々のトラウマティックな状況をやりくりするために最初の交代人格を形成する。この時のトラウマは生命の危機と言うほどのことが無くても起こりうる。

典型的な症例として、9才の女子が13才の従兄にレイプされた場合などがあげられよう。この症例ではセックスをしてそれを楽しむことが出来るという交代人格を形成した。それは性行の際に自分の“男達”を手玉に取ることが出来る売春婦の人格であった。この様に交代人格は未だ未熟でそういったトラウマを経験から処理できない人たちが困難な状況を乗り切るためにデザインされるのである。従って治療で要求されることは感情がどのようにその困難を乗り切ることが出来るかを社会的にトレーニングすることである。自分がこの状況を乗り切ることが出来るかと理解したとたんに、交代人格の存在意義は薄れ、だんだんぼやけて廃用萎縮となっていく。

キャリーは私の定義で言うところのDIDであった。彼女は22才になって私が彼女を治療し始めるまでいっさいの交代人格を形成していなかった。しかし私は愚かにも彼女にMPDであると言う診断を誤って告げてしまった。彼女はその診断に堪えられず、そのストレスから交代人格を形成してしまった。後にこの交代人格はジャネットと出会い、彼女を自分の“母”であると思うようになった。そして、私は彼女の“父”であり“産科医”であると。なぜなら、私がその交代人格を生み出すことになったからだ。幸いにしてその

交代人格は、キャリアが人生最後の日を迎えるまで自殺を妨害する役割を果たしていた。

イマジネーション：イマジネーションという言葉はラテン語の“イマーゴ”(imago)から来ている。これはイメージ(想像)という意味である。イマジネーションとは、“以前現実には全く感知されなかったり、現在知覚されていない何かの心的イメージを形作る力、または行動”と定義される。解離とは心的外傷後のプロセスであり以前一つであったものが壊れて二つになってしまう現象であるのに対し、イマジネーションは以前存在しなかったものを作り出すことである。イマジネーションは人間の心が普遍的に持つ機能であるので、心の二つの部分(理性と感情)がそれぞれのタイプのイマジネーションを利用するということもまたごく自然なことである。理性は”インスピレーショナル・イマジネーション“を利用し、感情は”感情的イマジネーション“を利用するのである。インスピレーショナル・イマジネーションは偉大な芸術や文学に貢献しており、普通の人間には利用できない膨大なアイデアの資料をもたらす。このプロセスはそれを用いることが出来る人々にとっては最も有効な手段となる。

しかしながら強い陰性の感情が“感情的自己”Emotional Selfを支配している時には“感情的イマジネーション”が出現する。危険なIICを作り出すのは通常復習への欲求である。私は法精神科医として殺人犯人達の殺人の企てについて研究したことがある。彼らは通常個人的にはあまり危険と言うことはないのだが、かつて彼らが愛した対象の人間に対しては非常に危険である。彼らはかつて彼らが愛していた虐待者に対して復習しようとしており、自分が現実にある殺人マシーンの中にいるかのように想像するのである。この様な殺人衝動の強いIICは時に肉体を乗っ取ってしまうことがあり、ついにはもともとの虐待者ばかりでなく無実の一般の人々をも巻き込んで殺してしまうということが起こる。

心理学論文をレビューしてみるとそうした企てをするIICやプレイメイトはそれを想像した人間の体の外にあると結論づけているようだが、それは正しくない。私自身が治療したケースでもそうした想像的創造物(Imaginary Creature)は体の外にいたり中に入り込んだり要求によって自由に場所を変えるのである。IICはそれを持っている彼ら(Emotional Self)が作り出したのであり、彼ら自身がIICに何をさせるか、どこでさせるかなどをコントロールすることが可能である。彼らは自分が作り出したIICを人形の中に入れておいたり、あるいは自分自身の体の中に同居させたり、自分の欲求によって自由に変化させうる。

MPDに於ける交代人格の作成

最初の解離は理性(Intellectual Self)から感情(Emotional Self)が別れてしまうことである。Emotional Selfは安全な場所に隠されて眠りにつく、そしてそこではEmotional Selfからすべての性格的要素がはぎ取られてしまう。理性(Intellectual Self)はISHとなり交代人格の製造にあたる。ISHは交代人格を作成するにあたり、Emotional Selfがもともと持っていた性格的要素を材料にする。この性格的材料には将来的に発達するだろう性格的部分が含まれている。もともとEmotional Selfの性格の一部であったのだから後に

無理なく Emotional Self に統合されることが可能である。

ISH は交代人格をあたかもコンピュータのプログラムであるかのように、その時点での体の運営に必要な目的に即して作成する。交代人格はプログラムされたことだけを実行しそれ以外のことは一切なす事が出来ない。交代人格の人格的要素は時間がたっても成長も発達もしない。隠れて寝ている Emotional Self もまたそうである。最初の交代人格は肉体を運営する任をになっている。False Front と名付けられるこの交代人格は、受動的で虐待する両親に殺されないように立ち回るために作られている。それぞれの False Front は子供（自分）の成長に合わせて成長することが出来ないで短い時間しか担当することが出来ない。それで自我の期待される発育に合わせて次々に新しい False Front に置き換えられていく。False Front は怒りの感情を表現するにはデザインされていないために、虐待が続いているとその怒りを処理するための新しい人格が作成される。これが Persecutor Alter である。この交代人格は反社会的な仕返しを行うので、ISH は Rescuer 交代人格を作成する必要に迫られる。Rescuer は Persecutor が社会的に困った振る舞いをしてもつじつまを合わせたり、危険が有ると必要とところに通報したりして事態を解決しようと試みる。その他の交代人格としてハンディキャップ交代人格があげられよう。他の子供達と遊んだり生活したりするときが必要となるので作成される。この様に数多くの交代人格が作成され違った役割が振られている。そして ISH が存在すると言うことが大事である。Emotional Self として知られている元々の人格（Original Personality）は子供時代や若いときには、他の交代人格達と一緒に存在しない。治療者が Persecutor の怒りの感情を排除するのに成功したときにのみ、隠れていたところから出てきて現れる事が出来る。その時には Emotional Self は自分と他の交代人格達がすべて安全であり迫害されないという認識を得ていなければならない。そうなってくると次第にすべての人格の性格的要素が一つに溶け込んで来るようになる。

DID における交代人格の作成

Emotional Self が十分に成熟していないため処理できないような問題に遭遇すると理性 Intellectual Self はそれを処理できるような交代人格を創造する。この交代人格は Emotional Self に於ける思いつきや感情の動きが引き金になって活動を開始する。患者が年齢を経て成熟するに従って交代人格がもたらす解決法はだんだん物事を解決しないようになってくる。交代人格の行動は患者の真の要求を満たさないようになってくるのである。患者は今まで交代人格に物事をあたらせていたのが適切に処理されなくなるので同年代の人々から物事に対処するすべを学ぶ必要が出てくる。

IIC の生成

想像的存在は子供達においては非常にしばしば観察され、またそれは精神病理的な意味を持つことは希である。それらは Emotional Self によって生成され、様々な社会的、個人的ニーズに基づいている。それが我々治療者にとって大きな社会的問題となるのは大概が裁判となるようなケースにおいてである。多くは殺人事件である。IIC の存在理由のほとんど

どが怒りと復讐欲求である。我々精神科医にとって混乱の原因となるのは、しばしば怒りの反応の原因が、レトロスペクティブに見た場合、幼児期の虐待にあるように見え、その為には虐待が“交代人格”を作成する原因だったように誤解されてしまうことである。(訳注：もちろんこの場合交代人格とするのは誤りで IIC である。)しかしよく調べてみると、虐待が有ったとしてもそれは生命を脅かすような虐待ではなく、しかし怒りや復讐心を虐待者に対して抱くようになるには十分な虐待なのである。その様な怒りの心を持った子供は一体どうするのであろうか？ 彼は自分を虐待する人間を痛めつけたり、殺したり出来る“殺し屋”の存在をイメージして具現化するのである。社会的なルールや社会においてこうしたことに対処するすべを未だ学んでいない子供にとって最も簡単な答はそうすることなのだ。子供にはこうした感情的イマジネーションを利用する年齢の下限は存在しない。ヘンリー・ホークスワース(訳注：ヘンリー・ホークスワースの物語は The Five of Me であるが日本ではまだ紹介されていない)いかにして彼自身が IIC である“ジョニー”を作り出したかを記述している。それはヘンリーの1才と2才の誕生日の間のことであり、彼の父が赤ん坊のヘンリーが何か悪さをしたときに叱るのだが、そのそしりを一手に引き受けて非難されるべき対象としてジョニーは具現化されたのだ。要求があればそれは叶えられるのである。ヘンリーは後に4才になってMPDを発症するに至った。故に彼はグレード5の被催眠感受性を持っていたのだ。そして、彼の父親が彼を殺そうとしているとヘンリーが感じた時に、彼は解離し、交代人格を作り出すことが出来たのだ。たぶん、彼の被催眠感受性の高さは幼くしてイマジネーションを利用することを可能にした事に関係しているのだろう。グレード5の被催眠感受性と頻繁に起こるイマジネーションの利用とが被虐待児童の臨床的描出を非常に混乱したものにしてしまうのである。

他にも IIC を形成するには多々の理由がある。孤独、傷つけられた感情、恐れ、いらだち、等々。世界中の子供達にとって IIC を形成するのに何の制限もない。大人が見落としているのは、IIC は非常に簡単に形成しうると言う事と、作るのと同じだけそれらを意志の力によって消去することが容易であると言うことである。IIC を消し去ってしまおうと決意することは、その子供にとって IIC をずっと側に置いておくことでもっと困ることが起こる、と気付くことである。それに子供が気付いたときには、“消えてしまえ”と言うことが出来る。そう言うことが出来たとき、IIC はもう存在する事が出来なくなってしまう。統合を目標とした治療をする必要は全くない。IIC は基本人格の性格の部品から生成されたものではないので Emotional Self に統合されるわけもない。IIC はいわば新しい事を想像することを具現化すると言うところから来ているので、子供にとって自然な自己の一部では無い。IIC はすべて使い捨ての部品から成り立っているのである。

交代人格と IIC の特徴的相違点

年齢：交代人格は患者が最初に交代人格を作成した年齢よりも上である。交代人格は2 - 3年は成長することが出来るが、成人患者に於いてはほとんど暦年齢よりも若いことの方が多い。IIC はどの年齢も可能である。その時点での患者よりも年上のことも有れば若い

こともある。しかも、必要に応じて自由に年齢を変化させる。ある時 IIC は3才であると言ひ、またある時には7才と言ひ、別の時には14才である等という。IIC には年齢について確固たるものが存在しない。

ISH と交代人格の心の中での外観：ISH またはヘルパー人格によれば、心の中に於いて交代人格は確固たる外観を持ち、強烈な色彩を放ち、一人の人間のように振る舞う。または渦巻き状の色をしていることもある。いずれも肯定的な考えを持ちはっきりとした意見を持っている。彼らは自分たちがどのように見えるかを知っており、そして自分たちの名前を知っている。ISH またはヘルパー人格は彼らは自分たちの一部であるという認識を持っている。

ISH またはヘルパー人格が IIC を見たときには、はっきりとした輪郭が無く、病的に定義づけられており、色彩が無く、物質的存在感が無い、と表現する。全体が感情の固まりのように見えると言ひ、しかもほとんどが怒りの感情ばかりだと言う。ISH またはヘルパー人格は IIC は自分たちの一部ではないと言ひ、IIC を全く自分たち(交代人格と基本人格)が傷つくことなく取り除くことが可能だと言っている。

患者の中か外か：MPD や DID の患者達は交代人格の声を自分の頭の中にだけ聞くことが出来る。それらは患者の友達であったり敵対者であったりするが、交代人格は安定していてそれが出現したときの外観と目的を保っている。時間的に変容したりしない。

一方患者は IIC の声を自分の頭の中に聞くことも有れば外側から聞こえることもある。人形の中に IIC がいたり、その他の物の中にいたりすることが可能である。IIC は時には友達の様であったり敵対者の様であったりするが、容易に変容して反対側の存在になる。度の様にも患者の意のままに変容可能なのである。IIC の存在意義や行動も時と場合によって変化して、患者の生活様式の変化に合わせる。IIC はこれと言った特定の行動様式もなくその行動は予測不能である。

治療者に対しての外観：交代人格はすべて患者の保護者である。有るものは怒りの交代人格であったり、また有るものはなだめ役立ったりするが、すべては患者の生存の為の努力であり、ストレスのかかっている環境をやりくりするための手段なのである。交代人格は通常は人間である。しかし、私は一人だけウサギの交代人格を見たことがある。それは彼女の父親が彼女を撃ち殺そうとしたときに、人間よりも速く走って逃げる必要性から作成されたウサギの交代人格なのだった。ウサギの交代人格は統合直前には小さな女の子の姿に変換された。これなどは特殊な例である。交代人格の訴えは虐待者に焦点が合わされていて、それらのまねをしている事が多い。最初の面接時には False Front は他の交代人格がいることに気付いていないことが多い。だから治療者が要求しても他の人格を紹介したり見せたりすることはない。が、初期の面接に於いては、交代人格は思いもしない時に急に浮上して出現する。これは ISH が治療者に対して患者の心の中で何が起きているかを知らせようとしているために起こる。

IIC はホストの体や主人格を守る必要も無く、もともと破壊的な欲求を持っている。IIC

は治療時に部屋の中にいる人々に怒りの感情を抱いているが、誰一人その様な敵意に思い当たる人がいないのが普通である。IIC は体の外にあっては人形だったりペットだったり、やはり人間の形をしていたりする。IIC は迷信深い、宗教的観念の強い人間が作成した場合悪魔や、邪悪な魂で有ったりする場合がある。たまたま、留置場で精神鑑定のために長期ではなく多数の鑑定医によって面接を多数受ける場合など、あるケースでは担当の鑑定医毎に異なる IIC を作成したことがある。それらは鑑定医の好みに反映されており、存在が否定されるよりも医師に受け入れられ、得意に存在を主張するために作成されたのである。IIC に於いては奇妙な IIC 間の関係が報告されている、例えば、ある IIC は他の IIC のカバラの教師だったりする。

コントロール： MPD のケースに於いては殆どの交代人格は ISH のコントロール下にある。ISH はたとえその交代人格が拒否したとしても再び呼び出して必要な行動を必要に応じて行わせることが出来る。またその行動が自己に危害を及ぼす可能性が有るときにはヘルパー人格を呼び出して事に当たらせる。ISH は Persecutor 人格の行動を止めようとはしないが、その行動が自傷の恐れが有るときにはそれを防ぐことが出来る。

危険な IIC は Intellectual Self から Emotional Self から制御を受けない。まるでぎっしりと炸薬の詰まった、しかもテレビカメラや単純なワンチップコンピュータでしか制御できないスマート爆弾の様な物である。IIC は復讐をするためにデザインされており怒りがいっぱい詰まっていて、ともすると攻撃目標がどれなのかさえ考えようとしない。攻撃目標は誰でも良く、かつて自分を虐待したり家族を虐めたりした人間に似ているだけで十分攻撃目標となりうる。似ている人間というならまだましな方で、荒れ狂う子供が誰彼構わず当たり散らすのと同じように全く関係無い人々をも攻撃目標とすることもしばしばである。とにかく IIC は目の前にいる人間に標準を合わせ易い。社会的判断とか熟慮などが IIC をコントロールできることはまず無い。IIC はそれを作った人間がやる、と思ったことはとにかくやるのである。それが殺人でも、違法でも。。

交代人格と IIC の破壊

MPD の交代人格：怒れる交代人格に対して慎重な催眠療法が必要である。すべての交代人格は元々の人格に統合されなければならない。交代人格はオリジナルの人格の性格をなす部品から成り立っているので破壊されると言うことはない。記憶も完全な統合が起これば患者の記憶として取り扱われるようになる。統合がなかなか進まないときには、交代人格が自分たちが殺されようとしていると訴えて統合に抵抗するときがある。しかし彼らは最終的な人格の一部として形を変えることは有っても存在し続けるのであると説得することで納得することが多い。

DID の交代人格：交代人格は7才以降に困難な状況を乗り切るために作成されたのであるが、本人が自分でそれを乗り切ることを学ぶ必要がどうしても起こり、だんだんと学習する結果、交代人格はその役割を終える。劇的な統合という物はなく交代人格はその役

目が終了するとだんだんとおぼろげとなり消滅していく。患者の人格がだんだんと成熟していき、交代人格はその必要性も無くなりまたその欲求も存在しないと悟るようになる。交代人格が殺されたり、どこかへ放り出されたりすると言うような議論をする必要もない。交代人格は自分たちの中で何が起きているのかを知っておりそれを受容し最終的にはだんだんと消滅していく。本体が成熟して、交代人格が彼女を守る必要が無いという状況まで待つことが必要なのである。

IIC：それぞれの IIC は Emotional Self の欲求によって作成されるため、Emotional Self そのものによって破壊することが可能である。治療者は患者自身がそれぞれの場合に於いて、IIC を消去するべく決意するまで如何に誘導していくかが肝要である。IIC が法律的処罰を逃れるために作成された場合、裁判が終了して患者が終身刑を受けると IIC は存在意義を失って消滅する。しかし刑務所の中で他の受刑者達と上手くやっていくための IIC に変容する可能性もある。そう言うときにはハンディキャップを持った IIC を作る事が多い。

私が最初に法廷で出会った患者は、最初3つの IIC を持っていたが、次に死刑囚房で有ったときには2つの IIC が残っていた。今だ機能している一つの IIC は“殺人者” IIC であり、現在は死刑囚房で麻薬をやっていた。もう一つは“告げ口屋” IIC で、自分の弁護士が来るといそいそとおべっかを使いに行く。どちらも監獄の中で生き延びるために必要な IIC である。消滅してしまったのは“救助者” IIC だった。死刑囚房にあっては“救助者”はもはや何の助けにもならない。基本人格は刑務官に対して非常に従順で、そうした従順さを演じる役割を楽しんでいた。

死んだ人の魂であると主張する IIC がかなり昔から存在していた。その IIC は何らかの媒体に伴って出現する。彼らはしばしば、“自分が所属している世界”に送られ“光を見よ、その光に向かって進め”と言う具合に操られてきた。これは彼らにとっては非常に正当な理屈で、彼らは“滅び”の為に出現し、やがては自分の“家”へ帰る。しかしながら、これらの IIC もすべて、ホストが自分のためにもう役に立たないのであると思わない内には、彼らが所属する世界へは帰らない。もしこういった死者の霊にホストや媒体から出ていってくださいと頼んだとしても、彼らはそれに異議を唱え、決して出ていくように説き伏せられることはない。

IIC の一つのバージョンである侵略する死者の魂に対しては世界中であらゆる宗教がエクソシズムを、何世紀の長きに渉って行ってきた。これは決して馬鹿でも出来ることでもなければ、無知愚昧や向こう見ずなことでもない。だのに精神科に於いてはそれが上手く機能していたとしても、“非科学的だ”の一言で片づけられてきた。それでもなお、そう言ったことが正当であるとされる場所や環境もあった。もし、患者が MPD でありかつ ISH が治療者にその精神的存在は“怒り以外の何者でもない”と語ったときには、それは ISH が IIC であると言うことを認めたことである。そして ISH はそれを何時までも保持しておく必要性がないと認めていることでもある。もしも、治療者が、患者の信じる宗教でありかつ、正当な指導者の名前の下に IIC に対して、簡潔な表現で“去れ”と命じることが心

地よくできる環境で有れば、IIC は消滅するだろう。そしてその IIC の精神的エネルギーは ISH によってリサイクルされる。ここで常に留意しておかなければいけないことは IIC を消去させる行動に出る前に、最初に感情や理性が IIC を作成するに至った原因を取り除いておく必要があるということである。

もちろん、一度 IIC を生成してからそれを消去せしめるよりは、IIC を作り出さないようにする方が良いので、治療者は患者にこれ以上 IIC を作らないように言うべきである。これはただ単にそう言えばよい。かつて或る MPD の女性が、毎晩夫を悩ませるためだけにいくつも IIC を作成したことが有った。私は毎週のように新しい IIC が出てくるのでいい加減くたびれてきていたので、自分の診療室で患者に、“バービー人形の製造工場は閉鎖だ”と言った。そしたら彼女はもうそれ以上毎晩新しい IIC を作成することはなかった。それで私は患者の MPD の治療に専念することが出来るようになった。

サマリー

交代人格は Intellectual Self によって作成される。MPD に於いては解離しており ISH の管理下に於かれている。一方 DID では未成熟な Emotional Self と密接なつながりを持っている。交代人格は患者の利益を守るべくプログラムされており、プログラムの許容範囲の内側でのみ成長出来る。交代人格は最終的にオリジナル人格に統合されフィットすべき元々の性格の特徴から作成されている。それ故、虐待者への怒りを除去した後では患者の解離していた Emotional Self と統合することが容易である。

IIC は新たに作り出された精神的存在である。(自我の性格的材料を基に形成されているわけではない) Emotional Self の意志によって感情的想像力をもって作成される。IIC が創造される時には膨大な量の Emotional Self がもたらす“敵意”とごく少量の“思慮”を原料とする。それらは以前の自分に対する虐待者と少しでも似ているところのある人間を攻撃目標とする。彼らは Emotional Self や Intellectual Self の持つ社会的通念とは全く無関係に行動するので他人にはとても危険な存在となりうる。すべての IIC は Emotional Self の意志によって作成され、Emotional Self の意志によって破壊することが可能である。もともと Emotional Self が持っている動機とはまた完全に別な問題である。